

第四十四回 「全日本中学生水の作文コンクール」 岐阜県優秀作文集

水について考える

主催 水循環政策本部、国土交通省、岐阜県

後援 文部科学省、厚生労働省、農林水産省、

経済産業省、環境省、

独立行政法人水資源機構、

水の週間実行委員会、全日本中学校長会

「全日本中学生水の作文コンクール」について

「全日本中学生水の作文コンクール」は、次代を担う中学生の皆さんに、暮らしの中で体験している水にまつわる話や、ご両親、ご親族、先生方から学び聞いた話などをもとに、「水」や「今後の水の使い方」について考えていただくという趣旨で、水の日・水の週間の行事の一環として実施しています。

今年第四十四回を迎え、国表彰として一作品が入選した他、岐阜県表彰として最優秀賞一作品、優秀賞二作品を選定しました。この四作品を優秀作文集としてとりまとめ、岐阜県のホームページに掲載します。

いずれも水に対する真剣な思いが伝わってくる作品です、ぜひご一読ください。

「第四十四回全日本中学生水の作文コンクール」(※岐阜県分)

一. 応募要領

① テーマ 「水について考える」(題名は自由)

② 対象 中学生(令和四年度に岐阜県内の中学校に在学中の者、または岐阜県内の義務教育学校の7～9年

次に在学中の者)

③ 原稿 四百字詰め原稿用紙四枚以内、日本語により表記されたもの

④ あて先 岐阜県都市建設部水資源課

⑤ 募集締切日 令和四年五月九日

⑥ 版權等 ・応募作品は個人作品に限ります。

・応募作品の版權は国土交通省及び岐阜県に帰属します。

・応募作品は返却しません。

二. 応募状況 応募学校数 十校、 応募総数 百二作品(一年…二作品、二年…九十六作品、三年…四作品)

三. 審査

応募作品を岐阜県で審査(地方審査)し、五作品を中央審査対象作文として国土交通省に推薦しました。中央審査における入選以上の者を除き、岐阜県表彰受賞者を選定しました。

目次

国表彰（中央審査）

【入選】

『源清流清』

垂井町立不破中学校

二年 矢橋 悠（やばし ゆう）

岐阜県表彰（地方審査）

【最優秀賞】（岐阜県知事賞）

『私たちの水』

多治見西高等学校附属中学校

二年 平岡 柚希（ひらおか ゆずき）

【優秀賞】（都市建築部長賞）

『小水力発電が見据える未来』

岐阜聖徳学園大学附属中学校

三年 道家 さくら（みちや さくら）

【優秀賞】（水資源課長賞）

『水と私』

岐阜聖徳学園大学附属中学校

二年 後藤 柚乃（ごとう ゆの）

垂井町立不破中学校 二年 矢橋 悠

テレビで樹氷を研究し続ける教授を追跡取材していた。樹氷とは極寒の地域に生えている樹木に霧状の細かい氷が吹き付けられて凍る現象だ。真っ白に凍てついた枝は、天気が回復した朝の陽にキラキラと神秘的な美しさを見せていた。

防寒具を着込んだ教授は冬の間、あちこちの森林で樹氷を削り取って採集した。研究室を持ち帰ると氷はすでに水になっていた。教授はろ紙でそれをこした。しばらくすると、水が通過したろ紙の上は不純物で真っ黒になった。ぼくは驚がくした。原野で純白の光を放っていた氷がこんなに汚れを含んでいるなんて思ってもみなかった。教授は言った。ろ紙の上にたまる物は年々増加していると。そしてこれはPM_{2.5}や光化学スモッグの原因、更には自然界では分解されないプラスチックごみだと。プラスチックが海洋汚染の問題になっているのは知っていたが、こんなに山深く、標高の高い場所にまで飛んで来ている事実が信じられなかった。ぼくが生活しているこの場所にも空中を浮遊する有害物質が無数にあるということだ。鼻フィルターでろ過しなければ、たちまちぼくの肺は真っ黒だ。想像していくと、新型コロナウイルスもマスクを通り抜け、すぐ鼻の先まで来ているようで恐かった。

樹氷のテレビを見たのと同じ頃、ぼくは新聞で「SDGs」という言葉に出会った。日本語では「持続可能な開発目標」と訳される。樹氷の調査はSDGsの目標の中にある「一三 気候変動に具体的な対策を」への問題提起になる。そして「一四 海の豊かさを守ろう」、「一五 陸の豊かさも守ろう」の取り組みを促す。結果、むだな資源消費にストップがかげられれば、「一三 つくる責任 つかう責任」の遵守となり、最終的には「一 住み続けられるまちづくり」を実現化できる。十七個もの目標達成は

大変だと思ったが、それぞれつながって解決できる。でも、と、ぼくはすつきりしなかった。大事なのは分かるが、守るのが当たり前のこと。取り組みのアピールは「ほめて」という偽善的な呼びかけのようで違和感を感じた。

そんなぼくのモヤモヤを取り払うような出来事があった。祖母の家に遊びに行った時のことだ。ちょうど家の排水と下水をつなぐ工事中で、いつも車を止めている庭が作業場になっていた。日曜日で作業をしている人はその日いなかった。祖母の話によると職人さん達はテキパキ仕事をこなし、工事後、見えなくなる箇所でもとても丁寧に作業してくれているという。それにしても、庭のあちこち大事な道具が点在していて話の印象とかけ離れている。前日に急いで帰ったのだろうか。その場所を見比べるうちに謎が解けた。職人さんは「わざと」道具を置いて帰ったのだ。

道具は庭木の根っこや水道メーターのそばなど傷つけてはいけない場所の目印だった。そばで作業をしていない職人さんでも大事な道具が置いてあれば注意する。職人さんの本能を活かした理にかなった注意喚起の方法だと気付き、ぼくはすごく感心した。注意書きしたり撤去する手間もいらない上、その分、作業に集中できる。無事故で作業を終えるのは当然のことだけれど、みんなが油断せず一つの方向を向くのは、なかなか困難だ。無理や負担なく結果を出せる秘策の一つを発見した気がした。そして、SDGsはこの延長にあるべきではないのかと思った。

海外の国は遠く離れた異国の地ではなく、ぼくが住む日本と海や空でつながっている。環境汚染も他の国で誰かが起こしているやっかいな現象ではなく、実は自分たちが加害者かもしれない。みんなに報告するために目標を守るのではなく、自然に良くなる方向へ舵取りできるといいのにな。水の惑星、地球を守るのはきつとそういう事だと思う。

『水』私たちが生きていく上で必要不可欠な物だと考えます。日本にはたくさんある河川があり、私たちの生活を支えてくれています。例えば、飲用。水道の蛇口を捻ると綺麗な飲み水が出てきます。家事にもたくさん水を使います。そして、農業。お米作りや野菜作りにも水は必要です。畜産業にも、必要な物となっています。あらゆるところで、『水』と私たちは切っても切れない関係にあります。

小学三年生の夏休みの時、「川はどこから水が来るの？」の一言がきっかけで、家族で岐阜県にある『分水嶺』を訪れることにしました。山の中にひっそりと、その分水嶺がありました。水を見てみると、透き通っていて、夏なのにとても冷たくて驚きました。

私が住んでいる市の北側には『木曾川』が流れています。その川を見てみると、そこで見た透き通った水とは違い、少し色がついた水になっていました。その理由を調べてみると、私たちの生活排水も大きく関わっていることに当時の私は、胸を痛めたことを今でも覚えています。

今回、この作文を書くにあたり、父や母とも水について話をしました。夏になると毎年のように『水の枯渇問題』がニュースで流れてくることを母から聞きました。その時期になると『節水』が呼びかけられることもあると聞かされました。私たちが、日々使用する水も『限りある資源』ということを再認識させられました。

また、一方で父は、平成一二年東海豪雨の被災者だったことも聞かされました。夜、どこが道なのか分からない。足で探りながら避難したことを教えてくれました。校舎の二階で寝られない一夜を過ごしたと聞きました。氾濫と枯渇、相反することが気象条件により起きていることが分かりました。『SDGs』を掲げ、動き出しています。その中の項目に

・安全な水とトイレを世界中に(第六項目)

・気候変動に具体的な対策を(第一三項目)
・海の豊かさを守ろう(第一四項目)

『水』に関わることが一七項目の中に三項目あり、とても重要な役割を担っていることが分かります。私たちができることは、何か考えた時に、最初の一步は、水を大切に使うこと。その次に、環境保全をするためにゴミのポイ捨てや汚物等を川や海にしないこと。そして、温暖化が進まないように再生可能エネルギーを駆使し、脱炭素で気候変動しないようにすることではないでしょうか。

ここまで聞いたり、調べたりする中で一つの疑問が湧きました。地球は陸対海で考えると三対七で海が大きく占めています。なぜ、枯渇問題が起きるのか。なぜ、発展途上の国々では水道ではなく、未だに井戸や川から水をくんできているのか。それも調べてみました。大きな要因として、上水道設備が整っていないこと、その設備を造る技術がないから、整備ができないことが分かりました。そして、海の水を浄水する設備には莫大な費用がかかることも分かりました。私の『海の水を利用する』という考え方は、少し浅はかで恥ずかしく思いました。その一方、アフガニスタンで現地の人々の生活環境を改善しようと、かんがい用水を造った中村哲先生は、行動力に溢れていて、感銘を受けました。

ここまでで感じたことは、私自身ができる身近なこととして、限りある資源の水を感謝しながら大切に使うこと、川や海でゴミを見つけたら拾える範囲で拾うことだと思います。そして、大人になったら中村先生のように発展途上の国へ行つて支援することが難しいかもしれませんが、少しでも多くの人に安全な水が届くように日本から何ができるのかを考え、行動していきたいと思えます。

サステイナブル・ディベロップメント・ゴールズ（SDGs）。この言葉を一度は耳にしたことがあると思います。国連で定められた「持続可能な開発目標」即ち、世界が今目指すべきゴールが十七にまとめられているもので、日本でも積極的に取り組みがなされています。地球上の「誰一人取り残さない」をモットーに、貧困や差別の改善、環境保全などを目標としています。中でも、七番目には「エネルギーをみんなに、そしてクリーンに」といった、近年話題となっている再生可能エネルギーが挙げられているのです。

自然の恵みを活用した、水力発電や風力発電などの再生可能エネルギーは、限りある資源に依存せず、且つ地球温暖化の原因にもなっている二酸化炭素の排出を抑えて発電できるなどのメリットが様々。現在、二〇二三年度の温室効果ガス四十六%削減（二〇一三年度比）を目指す日本にとって、高い需要を誇っています。

その中でも、どの発電方法がこれから導入されるべきなのでしょう。大手電力会社によれば、水力発電のエネルギー変換効率が、多くの発電方法の中で最も高いとされています。それならば、水力に頼ってしまえばいいと思いかもかもしれません。しかし、水力発電の象徴と言えは何でしょうか。一般的に連想されるのは、ダムを中心とした大規模な水利施設。新たに建設するとすると、莫大な建設費や森林の破壊、近頃では減少している適地の調査などの深刻な問題が待っています。また、環境を守ろうとして取り組んでいる事業が、かえって環境を破壊しているという矛盾が生まれてしまうのです。

一体どうすれば、このような事態を回避できるのでしょうか。その答えは、「小水力発電」にあります。小水力発電とは、出力が千キロワット以

下と小規模ではあるものの、既存の水利施設を利用して発電するため、環境負荷が少ないという最大のメリットがあります。現在は、その多くが農業用水路に設置されていますが、工場などの排水を利用して発電することも可能であるため、今後の沿岸都市部の工業地帯への小水力発電の建設が期待されています。さらには太陽光や風力に比べて、天気や時間に左右されることなく、安定した発電が可能であるのも魅力の一つです。

また、農業用水を活用した小水力発電の導入がもたらすものは、現在の日本にとって大きなメリットとなり得るものでしょう。近年農村地域では、過疎化や高齢化が急速に進んでおり、二〇二二年度に過疎地域に指定された自治体は、全国の市町村（東京二十三区を除く）の約半数を超えました。それに伴って、国が負担する過疎対策事業債の予算が年々増しているのが現状です。そこで、過疎化した農村地域に小水力発電を導入することで、その地域で資源の自給自足を図り、土地改良施設の維持管理費削減や地域振興に繋げることができます。より多くの地域が、このように小水力発電を導入すれば、過疎債を他事業へまわすことができ、日本の社会の生活環境の向上にあてることができるのです。小水力発電がこの先、国際的な課題と日本の課題の双方の改善に尽くしてくれる事を願っています。

日本は遙か昔から、米作りの文化が強く根付いていました。二千年経った今でも、私たちの食卓にはおいしいご飯が並んでいること。その事実が、農業がこの国を支えてきたという紛れもない証拠です。そんな農業を守っていくために、水の恵みは欠かせません。水との深い関わりを持って、長い歴史を紡いできた私たちだからこそ、地球全体の水を大切に守るべきなのではないでしょうか。恩恵を受けた分、水を大切に使うって報いる。いつまでも、この地球が青色だと言えるように。

朝起きて飲む一杯の水。体全体に染み渡り、寝ぼけた私の頭を目覚めさせてくれます。顔を洗い、歯を磨く。私の朝は水でできています。

蛇口をひねれば水が無限のように流れ出し、スーパーには、ミネラルウォーターが山のように積まれています。川にはたくさんの方が流れていきます。毎日当たり前のように使っているたくさんの方が、いかに大切に有難いものなのか、しっかり考えたこともありませんでした。それに、地球上の多くの場所で「水不足」が起きている現実も、どこかピンときませんでした。

でも、駅の通路であるポスターを見たとき、私の考えは大きく変わりました。心の奥が、少し寂しい気持ちになったのを覚えています。そのポスターは、アフリカの女の子が写っているものでした。水がたっぷり入った重そうなバケツを持ち、笑顔でこちらを向いていました。片隅の説明には、「この女の子の住む地域には、水道や川がないので、遠くの池まで水を取りに行かなければならない。」と書いてありました。生きるために、小さな子供が水を運ぶのです。

調べてみると、その子供たちが運ぶ水は、雨水や泥水のような汚い水で、飲料水にするには危険だということでした。実際その水のせいで、年間三十万人もの乳幼児が命を落としているそうです。生きるために運んだ水で亡くなる命があることを、私は初めて知りました。そして、地球上の水のうち、資源として私たちが利用することができるのは、たった0.01パーセントだということも。

世界の人口の増加や、近年ひどくなっている気候変動など、益々深刻になっていくと思われる「水不足」の問題。0.01パーセントの僅かな水を分け合っていかなければいけない時代に、私たちがすることはあるの

だろうか。私がしなければいけないことって何だろう。そのときは、はっきりとした答えは出ませんでした。私の中に考えるきっかけが生まれませんでした。

私の住む岐阜には、長良川が流れています。私は幼い頃から、この川を眺めてきました。その流れる音や、日に照らされて光る水面は、岐阜の山々に溶け込み、私たちの生活の一部になっています。長良川を見ていると、水が美しく流れることができるのは、人間が汚したり壊したりしない場所、丁寧に整備された場所だと思っています。だから、長良川が清流と呼ばれているのは、この土地に住んでいた人々が大切に生きてきた証であり、水と共に生きてきた証だと思ふのです。

そんな風に思えたとき、私ができることって大きなことじゃなくいいのかもしれない、という考え方が浮かびました。例えば、道に落ちているゴミを一つ拾うだけでも、川へそして海へと流れてしまうゴミが減るといふことです。こういう小さな行動でも、みんなが同じ方向を向けば、その力は大きくなって変化を起こすことができるかもしれません。

当たり前にあるようで、実はとても貴重な水。いくらでもあるようで、実は有限な水。人々が共に生きてきた水。そんな水について考え、守っていくことは、現代を生きる私たち一人ひとりの役割だと思っています。小さなことから始めたいです。そしていつか、世界中の人々と協力してみたいです。そうすれば、大きな変化を起こすことができる気がします。水のせいで命を落とすことがなくなる世界が、ぐっと近づく気がします。